

SY10-3

子どもの育てにくさと歯科健診
—虐待に気づく所見について

宮新美智世

¹元東京医科歯科大学小児歯科学・障害者歯科学分野²はなここどもの歯のクリニック

出された場合には、養育者や大人たちの不適切な行為が子どもに悪い影響を与えた帰結が含まれることがある。また、見過ごされがちな虐待の芽の早期発見や、問題点を多職種で検討し、子どもと養育者双方への指導やサポートにより育てにくさの軽減を目指すことができる。

乳幼児期は、乳歯が生えそろうに伴って、かみ合わせが形成される時期である。したがって、むし歯やケガ（転倒や衝突による口や歯の外傷）や癖などが、歯や口腔の発育や機能に影響する年齢でもある。具体的には、乳歯のむし歯や、歯や口のケガは、後で生え替わる永久歯の形の異常や歯ならびの異常を生む原因になる。また、食生活の偏りや貧しさ、不健全な生活習慣の中で生きる子どもには、むし歯や歯肉炎、口内炎など様々な異常が認められる。そして、歯や口腔顔面の問題は保護者にとっても容易に視認でき、身近な相談内容になりやすい話題も多いため、歯科医療者との対話は気軽に言いやすい。これらが、育てにくさに気づき、これを少しずつ解消する糸口にもなりうる。

歯科健診の間診で把握するのは、子どもの歯科受診歴、う蝕や歯肉炎、口腔関連の外傷や異常、口腔に関係する生活習慣の現状（歯みがき、しつけ、食生活）、健康状態、保護者の意識や生活状況、食べ方上の問題点などである。そのなかで、いわゆる歯科検診で以下のような項目が育てにくさに関わる。

- ①多量の歯垢が歯に付着している。
- ②多数のむし歯や歯の欠損、極度に悪い歯ならびとこれらの放置
- ③乳歯の抜ける時期の異常
- ④歯肉の出血や腫れ、赤み、貧血、口内炎など粘膜の異常
- ⑤歯の変色
- ⑥複数回の歯のケガ（歯が欠ける、折れる、ずれる、ぐらつく）
- ⑦歯肉や唇、口角、舌、粘膜、顔面のケガや傷跡（癬痕、火傷、バイトマーク、内出血）

さらに、各種医療者と以下のような情報について共有させていただきたい。

- ①子どもへの過度のしつけや暴力、甘やかし
- ②子どものケア、食事、医療への配慮不足
- ③子どもの複数回のケガ、事故歴、怯えや過度の過敏
- ④育児上の困難、不安、ゆとりの無さ
- ⑤問題をかかえる保護者や家族関係（病気、依存症等）
- ⑥子どもとの親密さの異常、共食の機会が少ない
- ⑦保護者がスマホから目を離さない、子どもに見せ続ける。

SY10-4

管理栄養士の立場から
一健診時における栄養相談について

太田百合子

東洋大学 福祉社会デザイン学部

集団健診の栄養相談では、食の悩みに気軽に相談できる支援者との出会いの場となるため、子育てしながらの食対応の大変さを理解し、「よくやっているね」「頑張っているね」などのねぎらいの言葉や解決方法を一緒に考える寄り添いが大切である。

保護者に寄り添う食支援

①保護者の食の向上に向けて

保護者の食の問題として、朝食欠食、食に関する知識や技術不足、食を大切にする心の欠如などがある。保護者の栄養不足は、疲れる、イライラすることにつながりやすいので、保護者自身の食生活に気を配る必要がある。煮るだけ、炒めるだけ、購入するだけなど、完璧を求めずにバランスを整える方法を具体的に伝え、栄養の大切さ、食を楽しむ大切さを伝えたい。

②食育を通して親子関係を育む

子どもの食事は、菓子類（菓子パンを含む）の増加、ごはん離れ、同じ食品ばかり、味の濃いものを好む、野菜不足などの現状がある。保護者の知識や技術、食環境などを丁寧に聴き、画一的にならない支援を行う。例えば、作りたくなるようなレシピの提案、市販のベビーフードや総菜などを利用したバランスのとれた食事などを家庭に合わせて伝える。食事の作り方の情報は、レシピだけでなく動画という方法もある。

保護者には、子どもの食べる量や栄養素だけに目を向けず、お腹が空く生活リズム、共食、発達に合わせた食形態、食べ物に興味を持たせる食育など、食環境づくりの大切さと具体例を伝えることが必要である。例えば、一緒に食材を選ぶ、葉野菜をちぎる、とうもろこしの皮むき、豆のさや出しなどのお手伝いから食材を見せること、触れることの大切さを伝える等がある。

③食の悩み解消から子育てを応援する

子どもの好き嫌いや同じものばかりを欲しがると、今回は食べても次は食べないなど子どもの食は予測できないこともあるなかで、保護者の思い通りにならないことが多く、何がいけないのか責任を感じていることがある。これには子どもの発達に関係していることがある。悩みの解消には、食に関わる発達の面白さを伝え、保護者の気持ちを前向きにさせながら、子どもとの関わりを育むことにつなげる。

フォローアップについて

食事相談は、常に医学的・心理的なアプローチが必要なたため、多職種で面談の内容を共有する。フォローアップが必要な場合は、総合的な支援計画を立てて考えていくシステムが必要である。